

本居宜長

国学

実証的な態度によって古代日本の姿を極めて、国体の淵源を明らかにしようとした。

坪井正五郎・白井光太郎・渡瀬元三郎

人類学

日本各地の古物や風俗など、様々な事物を研究対象とし、生きた人間の民族学として捉える。

新渡戸稲造

1898(明治31)年に『農業本論』を著し、その中で「地方(じかた)学」の必要性を唱える。

折口信夫

民俗を「生活の古典」と考え、「古代の顕現」と考えた。

「古代」は民族の心意の中に永遠に生き続けるもので、歴史を超えた存在

柳田国男

- 1, 歴史研究としての民俗学
- 2, 「経世済民」「何故に農民は貧なりや」
学問によっていかに民を救い世を立て直すか
世のため人のための民俗学
- 3, 言葉を重視した民俗学

南方熊楠

渋沢敬三

「陰徳」
他利の精神
日本文化の本質と意義を明らかにし、異民族の文化との比較検討に耐えうるまでに資料の整理が必要

宮本常一

無字社会を捉えるためには、調査者が自ら伝承者の一人であると自覚を持ち、必要な資料は自分の手で探し求めなければならない

岡正雄 今西錦司
(民族学) (日本霊長学創始)

金田一京助
(アイヌ研究)

梅棹忠夫
(国立民族学博物館
初代館長)

福田アジオ

「ムラ」の民俗学
小規模集の歴史それ自体をより実証的に描こうとする

和歌森太郎

民俗学の目的は。常民文化を通しての日本人の歴史研究にある

宮田登

日本人のカミ信仰

柳田と折口

柳田

民俗現象を比較検討することによって合理的説明をつけ、日本文化の起源に遡ろうとした
帰納的方式

現在残存する民俗伝承を比較していくことによって、その祖形ともいべきものをさぐりあてようとした

折口

マレビトやヨリシロという独自の概念に日本文化の起源があると想定し、そこから諸現象を説明しようとした
演繹的方式

民俗の伝承と古代文学を比較して、古代文学の中にふくまれた民俗的な意味を明らかにしようとした

柳田と南方

「柳田と南方の手紙のやりとりは、柳田が山人についての具体例を南方に教えてほしいと願ったことから始まった。南方はくわしく答えて柳田に協力を惜しまなかったが、両者の関係はやはり山人に対する意見の衝突で終止符を打った。柳田は敗残した先住民で山に入った者があり、その子孫が今も日本に残っているという仮説を立てて、その証拠を求めているが、南方はそうしたたぐいの者は存在しないと考えている。両者の交信の断絶を契機として、柳田の眼は山人を離れて常民へと方向を転ずる。それは柳田のみならず、日本民俗学にとっても大きな転回点を意味するものであった」(『柳田国男と南方熊楠』)

柳田は「神跡考」について、文章が複雑で常人には消化しにくい、と率直な感想をのべた。南方はこの批判を承服しなかった。「自分は世界の学者を相手にしているのだから、凡衆が読んでくれなくともかまわない」

やがて二人は、『郷土研究』という雑誌の性格についても激しい意見をたたかわせる。「この南方・柳田の論争での収穫は、柳田が〈平民の生活〉という研究上の目的意識を持ち出してきたことである。南方が、日本の民俗の学に行く手に、かれのいう〈民俗学〉や〈説話学〉を越えた、地方の生活を貫く不文法を考えているのに、柳田は、南方とともに問題にしてきた〈奇怪な伝承・習俗〉でなく、〈平凡な日常の伝承・習俗の全体〉をめざしはじめたがゆえに、南方のこれまでのありようのみをみて、南方のいまの言を理解しえない面が生じたものらしい」(『民俗の思想』)

もう一つの注目すべき対立は、柳田が、「万町ぶしその他の卑穢(ひわい)なる記事は、小生編輯の責を負う以上はこれを掲げぬつもりに候」とのべ、それに対し南方が、「これドイツなどとかわり、わが邦上下虚偽外飾を尚ぶの弊に候。小学児童を相手にするとかわり、成年以上分別学識あるものの学問のために土俗里話のことを書くに、かよの慎みははなはだ学問の増進に害ありと存じ候」(『六鵝保宛書簡』)

そして、竜灯伝説と耳塚の問題をきっかけとする激しい応酬によって、二人の文通はついに破局を迎える。

柳田国男

柳田国男は歴史を研究する民俗学ということを主張した

民俗学という学問は歴史を明らかにする学問である

基本的には現在各地で人々が行っていることを資料として歴史を明らかにする

世の中に変化しないものはないから、放置しておくとも昔の姿は分からなくなってしまう。だから歴史を明らかにするのだ

柳田国男は自分の学問は世のため人のためにする学問だ

実際の社会で要求していること、あるいは社会で起こっていることを解明することを民俗学の使命

1910年代は「山人」の民俗学、1930年代は「常民」の民俗学、1950年代は「日本人」の民俗学

「日本人」の民俗学、日本人の歴史を明らかにする民俗学

柳田国男の民俗学の特色 一つは歴史研究としての民俗学、二番目は「経世済民」、すなわち世のため人のための民俗学、三番目は非常に言葉を重視した民俗学

日本の中の地域差は日本の生活の歴史を表しているのだと考えたわけです。

日本のいろいろな所から資料を集めて比較をすると歴史が分かってくるということです。それが「重出立証法」という方法です。「重出立証法」のヒントとなったゴンム(G.L.Gomme)の著は新渡戸より借りたそうです。(佐々木喜善宛書簡70)

要するに日本語を日常的に話す人たちの民俗学ということになります。言葉の地域差を大きな手段にして歴史を考えるわけです。

みんなが現実にやっている行為、毎日朝起きて寝るまで、一年間正月から一二月までやっていることを調査して記録し、資料にする。これを「採集記録」といいました。偶然記録というものの価値を歴史研究が認めるのであれば、採集記録という形で、積極的に今の人々のしていることを記録して資料に使うべきだ

ここに柳田国男にとっての民俗学というのが成立する

何の問題もなく毎日平和に過ごした生活は文字に記録されることはほとんどなかった、ということです。ですから、平和で全く何もない所は、歴史がなくなってしまう、要するに記録だけで歴史を考えようとすると、記録が何もありませんから、歴史がなくなってしまう

過去の歴史研究が一番根拠に置いている、文字に頼る研究を批判して、新しい学問の成立を主張しました。偶然記録から採集記録へという形で新しい資料の発見となり、それが民俗学を作ること

過去の歴史研究が一番根拠に置いている、文字に頼る研究を批判して、新しい学問の成立を主張しました。偶然記録から採集記録へという形で新しい資料の発見となり、それが民俗学を作ること

南方熊楠・折口信夫

南方熊楠

学問的交流は常に検証可能な言説によってなされるべきである、という理念

折口信夫

古典を現在の現実として活かすこと、のみならずそこに未来の生活思想の兆しを招来しようとする
こと

新 渡 戸 稲 造

1907年(明治40年)の第2回報徳例会の講演で「地方の研究」について詳しく述べる。「地方学(ぢかたがく)」は、地方の歴史、文化、風俗・習慣を研究すること。

「詩人テニソンは、小さな一輪の花を取って、比花の研究が出来たら、宇宙万物の事は一切分かると言った。即ち、一葉飛んで天下の秋を知る如く、一村一郷の事を細密に学術的に研究して行けば、国家社会の事は自然と分かる道理である」

「東京近在で地理を教えるにも、富士山とか大井川とか緑の遠いものを教えずに、先ず其村の岩とか、近所の山とかを教え、川なら小川でも可いから、其村を流れて居るものから教えたい。歴史も其通りで、東洋歴史よりも、先ず村の歴史を教えたい」

新渡戸の「地方の会」に触発され自宅で「郷土研究会」を始める。

カリフォルニアで転地療養。この間に名著『武士道:BUSHIDO THE SOUL of JAPAN』を英文で書きあげた。1900(明治33)年1月、米国フィラデルフィアのリーズ・アンド・ビドル社より刊行。以前妻や恩師に尋ねられた“日本の宗教教育はどのように施されているのか?”と言う問いに答えるために書かれたもの。

新渡戸はボンに滞在中に自ら靴を作製。靴を作製した理由として著作『帰雁の蘆』の中で、“『職人の中靴屋程人物を余計出すものはない、此職業は黙って座っている仕事だから、沈思熟考の余地がある故に往々哲学者、宗教家、文学者などが靴屋から現れる。』と斯く云う事を読んで近所の靴屋に隔日出掛け製靴の稽古を始めた。”と書いている。

渋沢敬三

渋沢敬三の民俗学は物質文化に重点があり、扱う資料も有形民俗資料＝民具や絵巻物・錦絵などの絵画資料を対象としていた。

渋沢の主宰した日本常人文化研究所は民間の研究所であったが、日本における民具研究、物質文化、漁業史、塩業史等の研究に先駆的な業績を多く出し、有能な研究者を数多く育成した。

学問研究の基礎になる正確な資料の調査発掘の重要性と同時に、生活構造の全体的な把握がなされ、その中で正確に位置づけられ、比較がなされるべきであることを強調した。

宮本常一

柳田国男とは異なり、漂泊民や被差別民、性などの問題を重視した。

民俗学の研究の対象を「無字社会の生活と文化」と明確に規定するとともに、文字化された民俗誌はそれ自体文献資料であり、民俗学はそれを通して「有字社会の文化」をも視野に入れ、その「無字社会」との関わりを明らかにする必要がある。そしてこれに加えて、新たに有形民俗資料としての民具の研究を提唱した。

「長い道程の中で考えつづけた一つは、いったい進歩というのは何であろうか。発展とは何であろうかということであった。すべてが進歩しているのであろうか。進歩に対する迷信が、退歩しつつあるものをも進歩と誤解し、時にはそれが人間だけではなく生きとし生けるものを絶滅にさえ向わしめつつあるのではないかと思うことがある。進歩のかげに退歩しつつあるものを見定めてゆくことこそ、われわれに課されている、もっとも重要な課題ではないかと思う」（『民俗学の旅』）

AERA「民俗学がわかる。」について

- ・民俗学とは、年や時間の経過とともに何が変わり何が残ったのか、それはどういう理由でなのかを自ら問う学問
- ・中心であった農村に変わり都市の民俗学が必要になってきている
- ・国内民俗についての膨大な知識の収集が減った今、本質の解明には海外との比較が必要

閉塞状況にある現在の「民俗学」のこれからに思いをよせた内容で、今「民俗学」に関わる人達の決意表明とも思える本でした

民俗学とは

人々の日常生活や精神生活を知るためには、文字にはよらないで耳で聞き取る方法が有効だとして、口承・口頭伝承の世界に次第に傾く傾向が民俗学の一つの特色
民俗の言葉を重視し、それを生み出す郷土生活の心意究明を民俗学の中心に据えている

折口信夫は、神祭や舞踊・演芸・演劇・影絵・のぞきからくりなど、いわゆる民俗芸能の技に関心

モノ中心の物質文化については、渋沢敬三が1930年段階に民具の収集から民具を比較する視点を提起した

柳田の郷土研究・民間伝承学、折口の古代研究、渋沢のモノによる常民文化研究が一線に並びながら、1940年代に一国民族学の枠組みができ上がってきたが、結果的にその上に、民俗学の名称を冠するに至った。

毎日の生活のなかで何気なく行っているさまざまな行為や目にする現象も、全く理由なく行われたものではなく、それなりの意味と歴史とが存在している

現在に存在する具体的な民俗文化を体系化してその中から抽象して理論づけつつ文化的意義を考えてゆくような方法

その多くは渋沢の言う第一次資料にしかすぎない。これを比較研究に利用できる第二次資料にまで整理する作業も必要である。たとえば一つの地域社会にある一つの習俗が存在するというだけでなく、その社会でそれがどのような価値と意義を持っているか

民俗学はそうした日本文化の本質と意義をまず明らかにし、それが異民族の文化と比較検討にたえ得るまでに資料の整理がなされなければならない

「われわれ日本人の祖先が、くり返しおこなってきた生活(民俗資料)の記録を素材として、それらの変遷(歴史)の過程を辿り、その中から、日本人の物の考え方、すなわち日本人の精神構造を探り、日本人および日本文化の特色をとらえんとする学問である」現在は対象とした常民(庶民)社会は比較にならないぐらいの大変化を遂げてしまった。日本民俗学の方法論自体も変わってゆかなければならない。何事にも疑問を抱くところから出発し、過去の日本民族の生活の歴史を知ることによって、「より正しい事実」を知り、それにもとづいて、現在の生活を反省し、未来の方向への軌道修正をしよう

企業民俗学 (企業から)

企業民俗学 (関わる人達から)

参 考 文 献

- 「AERA 民俗学がわかる。」朝日新聞社
- 「日本民俗学」福田アジオ・宮田登・赤田光男 他 弘文堂
- 「民俗学への道」宮本常一 未来社
- 「忘れられた日本人」宮本常一 岩波書店
- 「定本柳田国男集」柳田国男 筑摩書房
- 「民俗学者柳田国男」福田アジオ 御茶の水書房
- 「南方熊楠を知る事典」飯倉照平 他 講談社
- 「十二支考」南方熊楠 講談社
- 「南方熊楠記念館」
- 「南方熊楠顕彰館」
- 「学問のアルケオロジー」東京大学出版
- 「盛岡市教育委員会先人記念館資料」

